



全消協ニュース

全国消防職員協議会発行／編集責任者 門間孝一／東京都千代田区六番町1 自治労会館／☎(03) 3263-0271
ホームページアドレス／<http://zensyokyo.jp/>



全消協総体でより一層の団結を

政府・連合トップ会談で団結権付与が正式に示された



消防職員に団結権付与

政府が公式見解を示す

全消協34年の悲願がついに達成されることになった。

2011年6月10日に政府・連合トップ会談が首相官邸で開催され、連合からは古賀会長、徳永会長代行（自治労委員長）、らが、政府からは菅首相、枝野官房長官らが出席した。その席で枝野官房長官から「消防職員に団結権を付与する」との政府としての公式見解が示された。

全消協は発足以来、民主的な消防職場の構築と消防行政の更なる発展をめざして活動してきた。発足当初は約2500人だった組織人員も、当局側の「違法な組織だ」「降格させる」との弾圧に負けず、現在では約1万3000人が加入する組織となった。これは全消協に加入している消防職員、そしてこれまで全消協活動を推進してこられた先輩方が、消防職員であることの誇りと使命感を持ち、仲間として助け合っている消防行政に寄与していくんだという気持ちを持ってきた結果である。

また公務員制度改革法案が可決されたわけではなく、どのように付与されるかは不透明な部分もあるが、全消協総体としてこれまで以上に団結し、住民のために今以上の消防行政を行うことのできる組織になっていかななくてはならない。今後も全消協会員一人ひとりが各消防本部において、住民との対話と消防団との更なる連携強化を図り、団結権を有する組織として認知されるような活動展開をお願いしたい。

団結権付与に関する政府の公式見解を受けて

2011年6月10日、政府・連合トップ会談が行われ、会談に先立ち行われた「公務員制度改革及び関連法案の扱い」についての申し入れにおいて、枝野官房長官から、政府公式見解として「消防職員に団結権を付与する」という発言があった。

自治体消防発足以来、消防行政は警察行政から脱却し、市町村消防のサービス行政として発展してきた。しかし、物の言えない、上意下達な職場体質は数々の不幸も生んできた。封建的なパワーハラスメントのある消防職場には「自殺」「中途退職」「メンタル」など、職場が疲弊した状態も垣間見られた。国際的にもILOは1973年より一貫して、日本の消防職員に団結権が保障されるべきであると勧告し、再三にわたり、日本政府が適切な措置をとるよう求めた。にもかかわらず、日本政府は、わが国の消防は、①歴史的沿革、②法制に基づく業務内容、③運営状況からいって、ILO87号条約第9条に定める「警察」の範疇に含まれるという主張を繰り返してきた。しかし、こうした日本政府のILO見解を無視する態度は、強い国際的な批判を浴びることとなった。

連合をはじめとする労働側の強力な後押しがあったため、消防職員の団結権の回復は現行公務員制度改革の中でも特に重要な事項と位置付けられ、政権交代を機に立ち上がった「消防職員の団結権のあり方に関する検討会」を経て、今回の官房長官の政府公式見解発言に繋がったことは間違いない。

しかしながら今後、自主交渉自主決定の大原則の中で様々な問題が発生することが予想される。自らの責任で自らの政策を構築していく能力の形成が必須であり、当然、労使というテーブルの上で消防気質がどう作用していくのか、消防当局と共に問題解決への真摯な取り組みが実現できるのか、市民理解が存在する労使の関係を模索していかなければならない。

全消協は、具体的な制度設計と消防行政の発展のために全身全霊を持って寄与していかなければならない。改めてこの歴史的改革がなされたことについて、自治労として連合関係者に感謝申し上げ、自らを律して取り組んでいく覚悟と決意をしたい。

全消協会長 迫 大助

全消協復興支援活動継続中 これまで44人の仲間が福島県で活動

5月7日から開始した、自治労とともに行う全消協復興支援活動は、これまで全国から44人の支援者が参加し、避難所の片付けや仮設住宅に入居する避難者の荷物搬送などの活動に従事している。支援者からは「消防の業務以外で復興支援に関わるのは初めての経験だったが、被災者の方の経験談も聞きながら、活動することができたのは非常に良かった。全消協全体で少しでも復興に向けた手助けをしていくべきだ」との声も聞かれた。7月10日まで活動は継続する。

第5グループ 第1チーム報告

全消協ボランティア第1陣として、四国ブロックより4人で参加した。

初日は東京駅に集合し、バスでベースキャンプに移動したのち、全体会議を行った。その後作業グループごとに分かれて活動内容について説明を受けた。私たち全消協の担当は、避難所にある物資の輸送・梱包となり、全消協の4人で深夜まで翌日からの準備を話し合った。

翌日からは本格的な作業に入り、



福島県浪江町東和避難所において、物資の輸送および梱包作業を行った。体育館内には、山積みになされた大量の古い毛布（古い毛布にはダニがいてバルサンで駆除しなくてはならない位のもの）や箱積にされている支援物資として古い畳があり、それらを梱包し20km離れた別の保管場所に2トトラックで輸送、保管する作業を繰り返し行った。

確かにこういった作業は大変であるし、ボランティア参加を考えている会員の方々は、災害現場での活動を想定していると思う。だが、現地の方の要望を受け、その

要望に最大限応えてあげることが必要とされているし、実際に現地では今回の活動に対して、「本当にありがたい」との言葉をかけていただいた。私は、このような作業も地域の復興に寄与しており、本気で大事な活動だと実感することができた。参加できたこと、そして現地でお世話になった方々に本当に感謝している。

東日本大震災では広範囲に被害が及んでおり、復興までは相当な時間がかかる。今回のボランティア活動には少数しか行くことはできないため、一つの活動自体は小さなものかもしれない。だが全消協会員ひとりひとりが、ほんの少しずつの支援の気持ち、現地を思いやる気持ちを持って活動すれば、1万3000人分の大きな力となつて、必ずや復興に寄与できる。

香川県消防職員協議会
会長 日本 敏春

第5グループ 第2チーム報告

今回、5月11日から14日までの四日間、二本松市東和町にある、浪江町救援物資本部に行き、支援物資等の搬送業務に就いた。

作業にあたり、浪江町民で津波に家を流された方や原発により圏外避難されている方々と、共に活動出来たことが非常にいい体験となった。

今後、全消協には長期的なボランティア活動をしてもらいたいと思う。

がんばれ福島・がんばれ浪江町
高松市消防職員協議会
会長 泉 谷 清 次



第6グループ 第1・2チーム報告

今回、職場の理解もあつて自治労が行っている復興支援活動に全消協として参加することができた。今回の支援活動場所は、福島市ホテル福島グリーンパレスをベースキャンプとして、浪江町が役場機能を移転している二本松市東和支所となった。

浪江町は人口約2万1千人、面積223・1kmの東西に長い町で、東部地区は漁港がある漁師町である。

地震時は、多くの方々が港から内陸に入った場所で活動をされていたそう、地震による被害はあまりなかったようだ。地震発生後片付けをしていると、津波警報が発せられ漁港へ船の確認に行ってみると沖に黒い影が見えたということで、そこからパニックになり蜘蛛の子を散らすように思い思いに逃げ回ったとのことだった。

避難後も余震が続き全く眠ることができないまま朝を迎えると、地元の防災無線に自衛隊が原発に入るといふ情報が流れた為、今度は市民一斉に町外に避難を始め現在に至っているとのことであった。

私たち第6グループは5月14日17時から支援活動説明を受け、翌日から活動を開始することとなった。

現地まで車で1時間かかるため、



朝食を6時30分にとり、7時30分に出発した。

主な作業の内容は、物資本部へ浪江町の町民が物資を取りに来られるので必要とされているものを渡したり、物資本部で不足する物資を備蓄倉庫へ取りに行つて運んできたといった搬送活動だ。

ただ、物資を置いてある場所が屋内ゲートボール場でも広く、運んでくる物資も米12トン（30kg×400袋）、おむつ50箱、レトルトカレー80箱など備蓄倉庫とトラックの間を何往復もしなければならず、気温も30度を超える中かなりの肉休労働であった。

作業の合間には、浪江町の町民が避難している岳温泉、土湯温泉、猪苗代町の連絡所まで物資を搬送する業務も行った。
（岳温泉は本部から車で40分、土湯温泉は50分、猪苗代町は90分かかる。）

浪江町の町民はこの他にも県外に避難されている方が多数いるそ
うだ。)

18日までが全消協第1チーム、
19日から第2チームが活動した。

第1チームは、福岡、大分、鹿
児島(2人)の4人で、第2チ
ームは、福岡、愛知、沖縄(2人)
の4人となった。

第1チームは、重量物搬送が多
かったが、第2チームは個数が多
い物資搬送が中心となり、精神的
に鍛えられる内容だった。

活動後半には、浪江町役場が東
和支所から二本松市街地の男女共
生センターに引越しをするという
ことで、物資本部の片付けが主な
作業となった。



第7グループ 第1チーム報告

(5月21日) 1日目 引き継ぎ会議
第7グループ第1チームとして
復興支援活動を行う四国ブロック
4人が福島市に到着し顔を合わせ
た。到着後自治労支援者を含めた
全体ミーティングを行い、その後
第6グループから詳細な引き継ぎ
を受け、初日の活動を終えた。

あれだけあった物資を備蓄倉庫
へ搬送し、次の作業のために整理
することが中心で。持ってきた荷
物を再度トラックで搬送しなおす
作業の繰り返しだ。

今回支援活動に参加させてもら
い、多くの方々と話す機会を与え
られ自分自身多くのことを学ぶこ
とができた。災害は必ず起こるし
想定できないことが起こるから災
害であって、想定範囲内であれ
ば災害とはいわない。そのことを
身をもって経験された被災者の言
葉には重みがあり、想定できない
ことが起こると思っただけから防
災に対する取り組みを進めていか
なければならぬと感じた。

最後に、忙しい中休暇をいただ
き送り出していたいただいた職場の皆
さんに感謝申し上げます。

大牟田市消防改善推進委員会
堺 利彦



(5月22日) 2日目 活動開始
7時30分にホテルを出発し活動
場所へと向かう。全消協支援者は
二本松市東和避難所の片付けと
なった。前グループからの引き継
ぎに基づいて作業を行い、同市建
設技術学校に物資を移動したの
ち、16時頃作業が終了した。その
後、送迎をしていただいたいる福
島県本部の鈴木氏の案内で、津波
被害の大きかった相馬市を視察し
た、あまりの甚大な被害に言葉も
出なかった。

(5月23日) 3日目の活動
7時20分にホテルを出発し、作
業場所となる二本松市建設技術学
校に向かう。本日の作業は昨日搬
入した支援物資の整理である。
岡山から到着した4トン車3台
分の支援物資を整理するのだが、
普段とは違う活動であり体力的に
も非常に大変であった。だが高知
県からの支援者2人が若い力を存
分に発揮し大活躍してくれたおかげ
で、作業もスムーズに進めるこ
とができた。

(5月24日) 4日目の活動
8時にホテルを出発し、避難所
(福島市湯野地区体育館)の片づ
けに向かう。いきなり「熊に注
意」と看板があり驚いたが、熊
には負けない気持ちで活動に臨ん
だ。
この日の作業は、衣類を処分場



に搬入し、使用済寝具を処分場に
運ぶために梱包することであった。
大量だったため体力的にもきつ
かったが、衣類はほぼ処分場に搬
入でき、使用済寝具は約半分を搬
入できる状態にすることができた。
ただ、たくさん未使用毛布も
あり、まだ他に活用できる所があ
るのではないかの思いもあった。
大災害時には必要物品の需要と供
給がアンバランスになってしまう
ことを改めて感じた1日であった。
17時まで作業を行い、19時から
次チームの中国・近畿ブロックに
引き継ぎを行い、第1チームとし
ての活動を終えた。



・今回の復興支援活動に参加して消防職員として、また自治体職員としてこの活動に参加でき「非常に良かった」というのが率直な感想だ。作業内容も消防職員にとってはやりやすく、被災者の方とともに協力して作業をしながら、地震時の感想やその後の避難所での生活状況や今の気持ちを聞くことができ、感慨深いものがあった。津波被害が大きかった地域も視察することができたが、テレビや写真と違い、自身の肉眼でその凄まじさを目の当たりにしたことで、消防職員として災害に対する危機感が非常に高まった。

完全復興まではまだまだ時間がかかると思うが、今後も全消協・自治労で復興支援活動を通じてほしいのと同時に、全員が「自分たちができることをやろう」との思いを持った5日間であった。

四国ブロック
丸亀市消防職員協議会
池口雄二
美馬西部消防職員協議会
田中直也
高知市消防職員協議会
岡英佑
高知市消防職員協議会
竹内大史

**第7グループ
第2チーム報告**

第7グループ第2チームは、5月24日に福島BC到着。編成は中

国ブロック4人と近畿ブロック2人の計6人のチーム。到着後、四国ブロックチームより支援活動報告ならびに引き継ぎを受けた。

我々のチームは、福島県二本松市にある浪江町民の避難施設東和支所での支援活動を行う予定であった。しかしながら、支援活動の進捗状況から急遽、福島市内での活動を行うことを福島市災害対策本部から要請され継続業務を行うこととなった。

まず、福島市信夫ヶ丘競技場に保管されていた災害支援物資の仕分け、搬出を行った。翌日から開催される中学陸上競技会開催に支障があるためとのことであり、段ボール箱に梱包された寝具類200個を2トントラック2台により福島市勤労者青少年ホーム福島市音楽堂へ移動させた。

また、福島市勤労者青少年ホームに備蓄されている生活物資



(米・飲料水・食料品等)を福島市笹谷東部応急仮設住宅に搬出した。新築されたばかりの仮設住宅では民間ボランティアの方が多く活動されており、入居される方が協力し笑顔で対応されていたのが印象的であった。

翌日も支援物資の搬出、整理を主な業務として行った。福島市国体記念体育館には全国から提供された自転車保管してあり、交通の便が悪い避難所で生活されている方に届けているとのことであった。我々も福島市笹谷東部応急仮設住宅に自転車を届けるためトラック2台に50台の自転車の積み込み運搬を行った。

27日からは福島市湯野地区体育館に移動保管されていた使用済みの衣類や寝具類等を焼却処分



するのための分別作業を行った。体育館内には数千枚もの毛布が集積しており、クーリーニングし再利用できるものと汚れなどにより焼却処分しなければならぬものとに分別する作業が困難を極めた。まずホコリとダニの戦いである。ホコリは作業中に飛散するためマスクの着用が不可欠。はじめは一般的なサージカルマスクを使用し作業を行う予定であったが、ホコリの量と体育館内の放射線量がガイガーカウンタで300μシーベルトと高値であったためN95マスクを使用し作業を行った。

ダニについては、近くのドラッグストアでダニ除けスプレーを大量に購入。作業2時間おきに休



息を取り、お互いに全身にスプレーを吹きかけ作業を行った。体育館の換気にも努め、放射線濃度は低下した。作業中に体調不良を訴える者もおらず、作業終了時にも報告はなかった。

翌28日には、焼却する寝具類、特に多量の毛布を2トントラック2台に積載し片道約30分かかる福島市あらかわクリーンセンターへ搬入した。前日同様、N95マスクを使用しダニ除けスプレーを全身に吹きかけ作業を行った。延べトラック7台分の寝具類を焼却処分

焼却した寝具類の総重量は約8トンであった。予定されていた福島市内での支援活動は終了。福島市



災害対策本部に業務終了報告を行った。

○復興支援活動を経験して
今回の活動を通して、活動した者がそれぞれ多くのものを学ぶことができた。

若い職員、中堅の職員で構成されたチームとして、それぞれの立場で感じたものには違いがあるものの、消防業務以外で被災地に赴き、後方支援を行うという今までにない経験をしたことにより、今後の行政職員として行わなければならない被災住民の立場に立った復興支援活動の大切さを身に染みて感じることができた。災害の規模からして、中長期的な復興支援は絶対不可欠であり、今後も継続した支援活動を行わなければならない。被災地、被災住民に対し金銭的な支援は絶対に必要なが、マンパワーはそれ以上に必要であると痛感した。

報告者
福山消防職員親和会
岩本展政
福山消防職員親和会
久安誠
福山消防職員親和会
赤木宣彦
福山消防職員親和会
漆原和也
四条巖市消防行政研究会
安達大祐
四条巖市消防行政研究会
小島教広

福山消防職員親和会
岩本展政
福山消防職員親和会
久安誠
福山消防職員親和会
赤木宣彦
福山消防職員親和会
漆原和也
四条巖市消防行政研究会
安達大祐
四条巖市消防行政研究会
小島教広